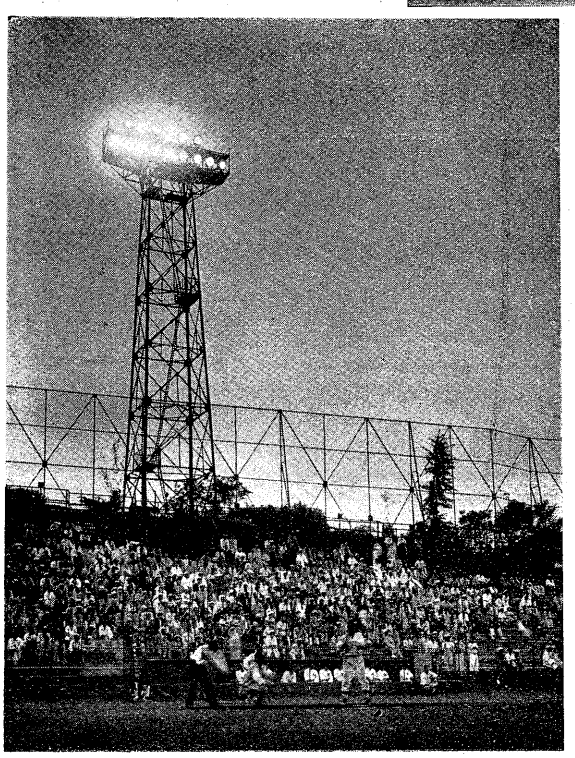
電氣野球大會に優勝して戰況を語る

富士電機野球部 大瀧生

第一回電氣野球大會は、本邦唯一の夜間照明設備を有する早大戸塚球場の煌々たる夜の太陽の下で八月十二日開幕、我が富士電機チームも出場したが、青年富士電機の意氣を示して、堂々斯界の强豪を屠つて、遂に光輝ある覇業を完成した事は、我が野球部にとつては實に近來の痛快事である。硬球部の參加チームは、富士電機、JOAK. 明電舍、遞信省簡易保險局、東京電氣、東京電燈の六チームであつたが、何れも錚々たる一流の實業團チームで、最初は富士電機なんかてんで問題にされなかつたのであるが、八月四日の主將會議の頃になつて、やつとダーク、ホースとして警戒され出したのであつた。然しかうした周圍の雰圍氣は却つて吾々の鬪爭的スピリツトを唆り立てるに役立つて「よしツ、來た何處でも來い」とばつかり、戰前既に必勝の意氣に燃えてゐたのである。然し準決勝の對 JOAK 戰はメンバーを錢村、刈田、秋田、久保等の六大學出身の名選手揃ひで固めてゐる上、放送局は球歷も淺く、過去の試合成績が皆目判明せぬので、何とも策の施しやうもなく、隨分苦心した事であつたが、とにかく打倒 JOAK. の意氣軒昂、愈八月二十一日午後七時半より對戰したが左にその戰績の概略を述べたいと思ふ。

優勝せる富士電機チーム



夜間照明下の戸塚球場

準決勝（對JOAK.戰）

	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	計
富	1	2	0	0	0	2	2	＝7
J	2	0	0	0	0	0	0	＝2

富士電機先攻にて開戰、富士電機は第一回青木の三壘線上を拔く物凄い三壘打で一點を先取すれば、同回裏錢村の安打に始まり忽ち二點を返されて、逆に一點をリードされ、强打者揃ひの放送局を迎へて、前途に一抹の不安を漂したが二回の表、西田の快心の二壘打に續き神山、石橋のタイムリ

ー、ヒットで直ちに二點を奪取して岩本投手をノックアウトし三對二のスコアとなつたがこの頃より西田投手の投球愈々冴えて何等の危氣もなく、錢村、苅田、久保等の好打者連を輕く三振に打ち取り、西田投手は實に快心の投球振りを續け、味方を泰山の安きに置いたのであつたが、他方富士電機の打力も亦益々好調を加へ、六回に二點、更に七回には青木、西田、神山が集中安打を連發して、打擊のチーム富士電機の本領を發揮して都合七對二の堂々たるスコアで完全に放送局を擊退、愈々決勝戰に出場することになつたのである。

これに對する球審森茂雄氏の批評

富士電機對ＡＫは七對二で富士電機の勝ちとなつたが、この試合で特に目立つのはＡＫの投手力の劣つてゐることだつた。殊にＡＫの投手は

應援中の富士電機、吉村社長（左）及び野村經理課長（右）

まだ若い。それに引きかへて富士電機の西田投手は前者よりも遙かに熟練されてゐた。夜間は投手の勝れてゐることが何よりの强味だ。それ

富　士　電　機

		打	得	安	犧	盜	振	四	死	失	殘
8	横　田	2	1	0	0	0	0	2	0	0	1
6	石　橋	4	0	2	0	1	0	0	0	0	1
54	平　井	4	1	0	0	0	1	0	0	0	0
75	青　木	4	1	2	0	0	0	0	0	1	1
3	田　邊	3	0	0	0	0	1	1	0	0	1
1	西　田	4	2	2	0	0	0	0	0	0	0
9	神　山	3	1	2	0	0	0	0	1	0	0
47	奥　山	3	1	1	0	1	1	1	0	0	0
2	小野口	2	0	1	0	0	0	1	0	0	2
		29	7	10	0	2	3	5	1	1	6

二壘打西田2、三壘打青木　捕逸小野口2

Ｊ　Ｏ　Ａ　Ｋ

		打	得	安	犧	盜	振	四	死	失	殘
8	錢　村	3	1	2	0	0	0	1	0	0	0
4	大　塚	4	0	0	0	0	1	0	0	0	1
5	窪　寺	2	1	1	0	1	0	0	1	0	1
2	松　本	3	0	0	0	1	0	0	0	0	1
16	苅　田	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
9	太　田	3	0	1	0	0	2	0	0	0	1
71	岩　本	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0
3	鈴　木	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0
3PH	(堀場)	2	0	0	0	0	1	0	0	1	0
67	秋　田	3	0	0	0	0	1	0	0	1	0
		25	2	4	0	2	6	2	1	2	4

に又試合馴れのした富士電機は終始統制がとれて、くづれなかつた事も勝利の一原因をなしたであらう。

決　勝　戰　（對遞信省簡易保險局）

	(一)	(二)	(三)	(四)	(五)	(六)	(七)	計
富	0	5	0	2	0	7	A	=14 A
遞	2	0	0	0	0	2	0	=4

決勝戰は八月二十三日午後七時半より遞信省簡易保險局と相見えることとなつたが、簡易保險局は東京電燈を17對４で擊破し、前夜は東都實業團の明星明電舍に14對８で勝ち、主として島（元法政）を中心としてチームを構成してゐる梟雄である。富士電機は西田投手の健腕愈冴え打擊も一番から九番まで萬遍なく當り、攻守共に非常な好調裡にあつたので、戰前既に敵を呑み、何となく勝てさうな氣がしてゐたが、第一回の表富士電機得點なきに、同回裏二點を先取されて一寸機先を制せられた形であつたが、二回裏俄然西田以下五安打を浴せて一擧五點を擧げ、一瀨投手をノック、アウトして、逆に三點をリードして大勢を決し、四回には更に神山、石橋、平井がタイムリー、ヒットを放ちて二點を加へ、六回には長打短打合せて四本の猛打を浴せて一擧七點の大量得點を擧げたに反し、簡易保險は六回に二點を加へたのみで他は無得點、西田の物凄いイン、ドロップの前には全く手も足も出ずに完封されたと同時に又その守備陣は健棒を誇る富士電機の爲に、完全に蹂躙された形であつた。斯くして富士電機は14A對４にて大勝して榮えある優勝旗を獲得したのであつ

たが結局富士電機の優勝は西田の好投と相俟つて發揮された健棒の勝利であつたと言つても過言ではなからうと思ふ。

これに對する球審森氏の批評

勝敗は富士電機の勝となつたが、富士電機の攻守が共にすぐれてゐた事は第一の勝因だつた。實際富士電機の打撃は凄かつた。然し結局は投手力の差と言つてよい。投手力では簡保局と富士電機とは甚しい相違であつた。勝つ方が勝つと簡單に片付ける譯ではないが先づ順調に行つたものと思ふ。

富　士　電　機

	打	得	安	犧	盜	振	四	失	殘
8 横田	3	2	1	0	1	0	1	0	1
6 石橋	4	0	1	0	0	0	0	1	1
5 平井	4	1	2	0	0	1	0	0	1
97 青木	3	1	0	0	0	0	0	0	0
9PH(三井)	1	0	0	0	0	0	0	0	0
1 西田	4	2	2	0	0	0	0	0	0
3 田邊	3	2	1	0	0	1	1	0	0
79 神山	2	1	2	0	0	0	0	0	0
7PR(高橋)	2	1	0	0	0	1	0	0	0
4 奥山	3	2	2	0	0	0	1	0	1
2 小野口	3	2	1	0	0	0	1	0	0
	32	14	12	0	1	3	4	1	4

二壘打横田、奥山、平井、西田

遞信省簡易保險局

	打	得	安	犧	盜	振	四	失	殘
7 磯野	3	0	0	0	0	3	0	0	0
PH(高部)	0	0	0	0	0	1	0	0	0
5 寺岡	3	2	1	0	0	0	0	0	0
8 島	3	2	2	0	0	1	0	0	0
9 金井	4	0	1	0	0	0	0	0	1
3 田丸	3	0	1	0	0	0	0	0	1
6 小阪	3	0	0	0	0	2	0	1	0
41 一瀬	2	0	0	0	0	0	0	0	0
4 (白瀬)	1	0	0	0	0	0	0	0	0
PH(吉田)	1	0	0	0	0	0	0	0	0
2 松元	2	0	0	0	0	1	0	0	0
PH、田端)	1	0	0	0	0	0	0	0	0
4 高橋	1	0	0	0	0	1	0	0	0
1 片山	1	0	0	0	0	1	0	1	0
PH(萩原)	1	0	1	0	1	0	0	0	1
	29	4	6	0	1	10	0	2	3

三壘打鳥、二壘打萩原、野選片山

「新聞印刷と電氣」

御　斷　り

本號までは豫定目次の通りに進んで來ましたが、都合により次號から下記の様に順序を變更することに致しましたので御了承願ひます。

（目次變更前編）

第一章　輪轉機と電氣裝置の大要
- 第一節　新聞印刷の話　（四月號）
- 第二節　紙に起る靜電氣の問題（五月號）
- 第三節　輪轉機の電氣的制御一般　（六月號）

第二章　レオナルド制御方式
- 第四節　レオナルド方式の應用例　（七月號）
- 第五節　レオナルド方式を輪轉機に應用するに當り考慮すべき諸點　（本　號）
- 第六節　誘導電動機方式との比較並びに運轉實施後の成績に就いて　（十月號豫定）

第三章　將來發達の方向
- 第七節　輪轉機に關して　（十一月號豫定）
- 第八節　電動機に關して　（十一月號豫定）

第四章　東京朝日新聞社に於ける最近の設備
- 第九節　電氣裝置に就いて　（十二月號豫定）
- 第十節　制御操作に就いて　（十二月號豫定）

＊本誌に記載されている会社名および製品名は，それぞれの会社が所有する
商標または登録商標である場合があります。